

The bereavement experience by fathers who lost his child

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/12694

子どもを亡くした父親の死別体験

井上ひとみ 稲垣美智子*

要 旨

本研究は、子どもを亡くした父親の死別体験を明らかにし、喪失後の夫婦関係を検討することを目的とした質的因子探索研究である。研究参加者は、9名であり、半構成的面接を行った。面接内容を逐語録に起こし、データ化し、修正版グラウンデドセオリー・アプローチで分析した結果、8つの概念が抽出された。

父親は、連絡を受けて駆けつけ、子どもの変わり果てた状態と妻の憔悴しきった状態に、【沸騰しかけた脳内が凍結していく瞬間】を体験し、【子どもの死に際し、父親が認識した役割】を果たす。喪が明けた後、父親は、【「母親が一番悲しい」と認めざるを得ない母子関係】を意識し、文化的・社会的に要求される【「男らしさ」を演じる努力】をするが、【表出できない本音が妻の誤解を生む状況】が生じていく。時間の経過と共に、父親は、【消耗・疲弊し「勘弁してくれ」の状態】に陥り、もはや、感情をコントロールできなくなり、【生じていく夫婦間相互のずれや溝】により関係性が破局していくか、【互いに向き合い積み上げていく夫婦関係】かの岐路に立つ構造になっていた。

子どもを亡くした父親のグリーフケアは、夫婦関係も考慮した新しいケアのモデルを開発する必要性が示唆された。

Key words

父親、悲嘆、子どもの死、夫婦関係、男らしさ

はじめに

研究者は、2001年より、子どもを亡くした家族の定例会に参加し、サポートグループや個別相談を行ってきた¹⁾。子どもの死は、親や配偶者などの他の死別以上にストレスフルで²⁾、病的悲嘆や長期に渡る適応障害が生じやすい³⁾と言われている。家族会員は、実質的には母親である。分かち合いで、父親の思いや体験を聞く機会はない。母親は、死んだ子どもに没頭し、父親は、喪が明けると仕事や社交に戻る。母親は、父親に対し、子どもや妻への愛情や配慮に対する疑問や不満を抱き、分かち合いでは父親へのネガティブな認識が共有されることがある。また、平成19年の離婚率は2.02件⁴⁾だが、家族会員の離婚率は高く、約2割が離婚しており、父親の体験や思いを知ることの重要性が感じられる。

Freud Sの「悲哀の仕事」⁵⁾以降、死別後の生活適応の促進は、悲嘆過程の通過が重要とされ、「段階説」⁶⁾や「課題説」⁷⁾等が標準モデルとして使用されて

いる。

国内の子どもを亡くした家族の研究も標準モデルが適用され、母親に焦点を当てた事例研究^{8)・9)}や小児がんの死別後の母親に対する短期療法¹⁰⁾とサポートグループ¹¹⁾、悲嘆反応のスケールの検討などがある¹²⁾。父親を対象としたものは、加藤らの¹³⁾父親の悲嘆体験と木村¹⁴⁾の母親の支援者として位置づけられた父親の研究などがある。しかし、父親の経験や思いが母親との夫婦関係にどのように影響しているかは明らかにされていなかった。

諸外国においても、父親に焦点を当てた研究は少なく、父親は、母親を支えるべきという役割意識や男性は悲しみの感情を抑制するという文化規範¹⁵⁾、多忙さと母親への気遣いが父親の悲嘆を後回しにさせる傾向¹⁶⁾、妻が悲しむ状況が父親の悲しみとなること¹⁷⁾などがある。しかし、いずれも、断片的な示唆にとどまる。

本研究の目的は、子どもを亡くした父親の死別後

金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻看護科学領域博士後期課程
* 金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻

表 1. 研究参加者

参加者	年齢 (歳代)	死 因	死亡年齢 (歳)	死後 (年)
A	30	インフルエンザ脳症	0	4
B	30	インフルエンザ脳症	1	0.5
C	30	インフルエンザ脳症	2	3
D	40	インフルエンザ脳症	1	10
E	40	乳幼児突然死症候群	2	10
F	40	乳幼児突然死症候群	0	15
G	50	乳幼児突然死症候群	0	15
H	50	乳幼児突然死症候群	0	15
J	40	てんかん	5	6

の体験や思いを明らかにし、子どもの死が夫婦関係に与える影響を検討することにある。

このことにより、母親を含めた周囲の人が、父親の死別体験を理解する糸口が得られ、また、より有効な子どもを亡くした家族への援助を示唆する資料になると考える。

研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインは、帰納的質的因子探索とした。

2. 研究フィールドと研究参加者

研究参加者の概要は、表 1 に示した。

子どもの死という稀有な事象の中で、参加者の条件を揃えるため、予期せぬ状態で乳幼児期の子どもを亡くした父親とした。乳児突然死症候群とインフルエンザ脳症の 2 つの家族会を通じて、9 名の参加が得られた。参加者は、死別後、0～15 年、年齢は、30～50 歳代となった。家族会は、20 年以上前に死別した親が、新規に参加する状況が稀ではなく、子どもを亡くした親は 8 年経ても悲嘆が継続しているという Lundin¹⁸⁾ の報告などから、死別後の期間を限定しなかった。また、7 名は、他にも子どもをもっていた。

3. データ収集方法

データ収集は、2006 年 3 月から 2008 年 5 月に実施した。

1) 半構成的面接法

半構成的面接を 1 回実施し、1 回の面接時間は、90～160 分、平均 120 分程度となった。

2) 面接内容

参加者に死別後の期間を限定と悲嘆の標準モデルを使用しないため、インタビュー・ガイドは、①死亡の経緯②死後の父親の体験と③母親との違い④夫婦関係への影響などを自由に語ってもらう。

4. データ分析方法

データ分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ¹⁹⁾を用いた。その理由は、本研究が「父親の死別体験」という数値化されない、社会的相互作用や人間行動の予測と説明に関わり、限定された範囲の説明力に優れ、方法が明確であることによる。

分析の手順は、まず、予測なく、乳幼児期の子どもを失った父親を「分析焦点者」とし、「子どもの死を契機とした父親の体験を、夫婦関係を含めた変化のプロセス」を分析テーマとした。分析の流れは、逐語録に起こしたテキストを分析焦点者と分析テーマに照らして、データの関連個所に着目し、それを 1 つの具体例とし、他の類似の例も説明できる概念を生成する。概念を作る際は、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例を記入する。データ分析を進める中で、新たな概念を生成し、分析シートは個々の概念ごとに作成する。同時に、他の具体例をデータから探し、ワークシートのヴァリエーション欄に追加していく。具体例が豊富でない概念は無効とする。生成した概念の完成度は、類似例の確認と対極例も比較してデータを見て、その結果を理論的メモに記入することにより恣意的に偏ることを防いだ。次に、生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討し、関係図にしていく。複数の概念からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概念を簡潔に文章化し、結果図を作成する。

本論文における 1 つの概念生成過程を例示する。以下は、インフルエンザ脳症で 1 歳の子どもの死を失った 30 代の父親の語りの一部である。

「管につながれた娘の姿を見て、僕は正直立っているのが精一杯。頭の中は、真っ白だったけど、嫁さんが、動揺していたんでね。声かけるのに必死になった。」

研究者はこの部分を、父親は強い衝撃を受けたが、妻を最優先させ、自分の感情を凍結してしまうことと解釈した。定義は、父親は、変わり果てた子どもの姿を見て、脳内が沸騰し、気が動転するが、憔悴しきった妻の姿に、瞬時に、感情を凍結し、妻を支えようと態勢を立て直すこと、概念名は、〈子どもの変わり果てた姿と妻の憔悴しきった姿が感情を凍結させる〉とした。他の概念も同様の手順で解釈し、最終的には 30 の概念を生成した。

5. 真実性の確保

面接は、研究者の思い込みを排除するために、参

加者の言葉や意図を確認した。データの真実性を高めるために、質的研究のワークショップに参加し、分析訓練を受けた。概念名が、単なる要約にならないように、類似例の確認と、対極例の比較により、解釈が恣意的に偏る危険を防いだ。また、研究の厳密さを確保するために全過程を通し、看護の知識と実践に富んだ、質的方法論のスーパーバイザーから指導を受けた。

6. 倫理的配慮

研究参加者に対し、家族会の代表を通して、事前に、研究の目的、方法、参加の拒否・途中辞退の権利、情報の適正使用、収集したデータの細心な処理に注意を払うこと。公表時は個人が特定されないように、個人の名前や場所などは記号に変え、ライバシーを保護することについて、文書を用いて説明後、参加の同意を得た。面接内容は、参加者の許可を得て録音した。また、データは、鍵のかかる保管庫に厳重に保存した。

結 果

分析の結果から、子どもを亡くした父親の体験とそれに関わる夫婦関係について、30の概念と8つのカテゴリーとが抽出された。以下、カテゴリーを【 】、概念を[]、インタビューで語りの具体例は字体を変えて「 」で表し、コアカテゴリーに下線を引き、子どもを亡くした父親の体験の概要（ストーリーライン）と、結果図（図1）を作成した。

1. 子どもを亡くした父親の体験の概要

父親は、子どもの死後、社会的要求を強く意識し、妻や家族を守るために「男らしさを演じる努力」に必死であるが、報われずに、ついに、【『勘弁してくれ』に至る消耗・疲弊】を感じていくた。それが、

結果図である。

子どもの死の連絡を受けて駆けつけた父親は、子どもの変わり果てた姿と母親の憔悴した姿に、【沸騰しかけた脳内が凍結していく瞬間】を体験する。父親は、死別による悲嘆をも凍結させて、【子どもの死に際し、認識した役割】の一切を引き受け対処していた。父親は、葬儀や49日などの一連の喪の儀式を経て、通常の社会的役割に戻っていく。父親は、母親が子どもに没頭していく状態を【『母親が一番悲しい』と認めざるを得ない母子関係】として容認するが、自分自身には、社会的に要求される役割を遂行すべく、【『男らしさ』を演じる努力】を強いるようになる。しかし、【『男らしさ』を演じる努力】は、母親には、子供に対する愛情の薄さや妻への配慮のなさとして誤解されながら、【妻の誤解を生む表出できない本音】があり、妻とのコミュニケーションが断絶するようになる。このような、緊張状態の持続に、父親はついに、コントロールを失い【『勘弁してくれ』に至った消耗・疲弊】に陥る。こうして、感情の抑制が効かなくなった夫婦は、【生じていく夫婦間相互のずれや溝】により、瓦解していくか、【互いに向き合い積み上げていく夫婦関係】に向かうかの岐路に立つという構造になっていた。

3. 各カテゴリーの説明

1) 【沸騰しかけた脳内が凍結していく瞬間】

妻より連絡を受けて、子どもの急変（死）に直面する過程である。[取りあえず駆けつける]、[子どもの変わり果てた姿と妻の憔悴しきった姿が感情を凍結させる]、[妻の涙に掛ける言葉を失う]の3つサブカテゴリーで構成される。

具体例 [取りあえず駆けつける]: 「会議をしていたら電話が鳴って、その最初の一言が、『心臓止まった』ということだった。突然のアクシデント過ぎて、凄いだきドキしたけど、どうやったら早く行けるのかその出来事に向うプロセスを考えた。」

具体例 [子どもの変わり果てた姿と妻の憔悴しきった姿が感情を凍結させる]: 「たくさんの管につながれた娘の姿を見て、頭の中は、真っ白。立っているのが精一杯だったけど、嫁さんがもう、あかん状態でね。声かけるのに必死やった。嫁と一緒に泣いていても仕方ないし。」

2) 【子どもの死に際し、認識した役割】

子どもの死によって、対処しなければならないと父親が認識した役割のことである。

サブカテゴリーは、[最善の選択と判断を下す]、[事務的手続きをこなす]、[葬儀の采配などの一連

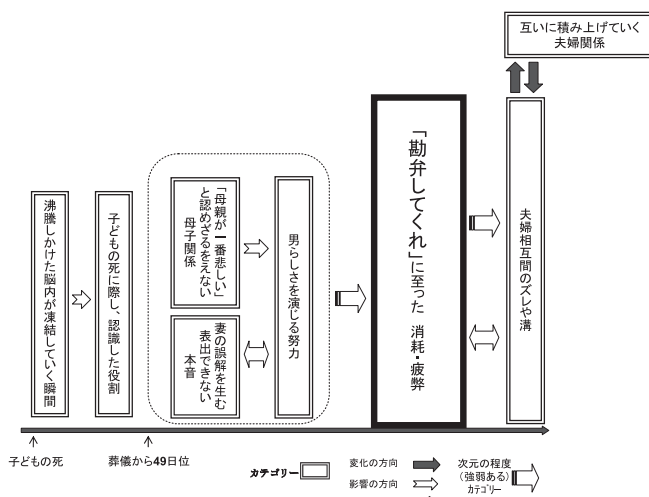


図1. 父親の悲嘆体験の結果図

が課せられる]、[生活の基盤を守る]で構成される。

具体例 [最善の選択と判断を下す]: 「治療をどこまでやるかを親が判断してしまうから、嫁はどうしても感情的になってしまうし、『出来る選択肢はこれで』と理屈で対処していた。」

3) 【『母親が一番悲しい』と認めざるを得ない母子関係】

父親が『母親が一番悲しい』と思い、母親を優先させるように働く条件のことである。

サブカテゴリーは [母親との身体条件の違い] [子どもとの関わりの頻度や時間の差] [家庭に占める父(夫)の存在の縮小] で構成される。

具体例 [子どもとの関わりの頻度や時間の差]: 「いくら子どもが好きだとしてもね。おむつを替えてあげた回数とか抱っこしてあげた時間を比べると母親より圧倒的に短いから。」

具体例 [家庭に占める父(夫)の存在の縮小]: 「子どもだけじゃなくて、時間的なものだけじゃなくて、父親の中の家庭が、昔よりはうんと少なくなっているかもしれない。」

4) 【『男らしさ』を演じる努力】

父親が、感情を削いで社会的に要求される「男らしさ」を遂行しようと努力すること。

サブカテゴリーは、[理屈で感情を納得させる] [妻の前で虚勢を張る] [残された子どもを守る] [家庭内をうまく収める] で構成される。

具体例 [妻の前で虚勢を張る]: 「女の人はいいいでしょ。男にとって泣くなんて大失態。子どもの話をすると泣き崩れて收拾がつかなくなる。それを見られたくない。虚勢をはっているんです。」

具体例 [残された子どもを守る]: 「母親の方は、亡くなった子には、自分しかいないみたいなところがある。そうすると父親は、きょうだいのことをしてあげなければならない立場になるんだ」

具体例 [家庭内をうまく収める]: 「深さとか重さが女性とは違うから、少し引いて、妻や家族の状態を見てすべきことを考える。喧嘩にならないように、治めるのが優先して自分は逃げざるをえなかった。」

5) 【妻の誤解を生む表出できない本音】

夫の言動の背景を構成するカテゴリーであり、サブカテゴリーは、『女に何が分かるか』と嘯く苦手な感情表出の本音] [平静さに秘めた子どもへの思いと破滅衝動] [蓋をせざるを得ない本音] [妻の涙を誘う事象への拒否] で構成される。

具体例 [『女に何が分かるか』と嘯く苦手な感情表出の本音]: 「奥さんに涙を見せることは極端にいや

がりますね。その性質のために、妻と仲違いしてしまうのだと思うのですが、『女に何が分かるか』と」

具体例 [平静さに秘めた子どもへの思いと破滅衝動]: 「私は家では甲斐甲斐しく朝食を作り、片付けて家を出ましたが、行く道々『ヒマなヤクザが私に因縁をつけてきて、刺し違えて死ねたらいいな。』そんな『全部ご破算』にできる方策を毎日考えていました。」

具体例 [蓋をせざるを得ない本音]: 「夫婦の間で『あの時にそうしていたなら』との思いが、互いを責めるので、口に出すことができず、結果的に会話が途絶える。」

具体例 [妻の涙を誘う事象への拒否]: 「『妻をいつまでも死んだ子のところに引き戻さないでくれ!』夫は、妻や子の笑顔を少しでも見たいと思っています。」

6) 【『勘弁してくれ』に至った消耗・疲弊】

時間の経過と共に、父親の感情のコントロールが効かなくなっていく状態のことである。サブカテゴリーは、[妻の状態に対する不安と緊張感]、『男の包容力』の重荷]、[逆転し、取り残されていく夫の悲嘆] [仕事では跳ね返せない子どもの死] で構成される。

具体例 [妻の状態に対する不安と緊張感]: 「子どもが死んで2~3か月たって、妻が上の子を連れて飛び降りるんじゃないかと思った」「一周忌で、次の誕生日、同じ季節がくるとダメなんですよ」

具体例 [『男の包容力』の重荷]: 「考えている以上に、お父さんが悲しんでいて、子どもの話をしたら自分が壊れてしまう。それで、『その話しはしないでくれ』という。会話がなから、お母さんはストレスたまるとし、お父さんは、お母さんを支えるどころか自分を支えているだけで精一杯。」

具体例 [逆転し、取り残されていく夫の悲嘆]: 「最初は気張っている。ひとしきの出来事が終わってホッとしたとき、だんだん父親と母親は逆転してくる。女は泣いても実生活に戻れるという自信が少しずつできていく。男は、最初にガタンと泣いて乱れなかった分、その間の着実な足跡が確認できていない。その辺が『勘弁してくれ』の恐怖心。自分は、いつ落ちるかと恐れている。」

具体例 [仕事では跳ね返せない子どもの死]: 「家庭内でうまくやろうとすると、実は仕事で歪み出してしまう、子どもを亡くしたストレスというのはどこにもぶつけることができないんです」

7) 【生じていく夫婦間相互のずれや溝】

子どもの死後、次第に夫婦の間に対処できないずれや溝が広がる状況である。サブカテゴリーは、[家庭（妻）と距離をとるようになる]、[『勘違い』させてしまう子どもの死]、[噛み合わない夫婦の認識]、[箍が外れて炸裂した感情の応酬]、[意味を失い瓦解していく夫婦関係]で構成される。

具体例 [『勘違い』させてしまう子どもの死]：「結婚するときに『かわいい娘だな』とか、『良い仕事している』からで、それが、子どもが死んだことによって、『ああ勘違い』と思う。自分が思っていた像と違い、『今、目の前にいるのは、なんてひどい人なんだ』と」

具体例 [噛み合わない夫婦の認識]：「『忘れろ、そして、今の家族を大切にしろ』と言うと、すごく妻に反発されますね。逆に亡くなった子どもの方がかわいそうに思えるからもっと抱え込んじゃう」

具体例 [箍が外れて炸裂した感情の応酬]：「生活を優先するために感情を抑制している部分が逆のかたちに出ている。外で出せないじゃないですか。結局、自分を出して、言いたいと言えるのは連れ合いしかいない」

具体例 [意味を失い瓦解していく夫婦関係]：「お互いのフェイズがあっていればうまくいくけど、8割がた喧嘩になってしまう。」「解決しておかないと、たぶん、熟年離婚みたいな形になる」

8) 【互いに向き合い積み上げていく夫婦関係】

夫婦が向きあいズレや溝に対処しようとする状況。サブカテゴリーは、[遺された子どもの存在が鎧となる] [夫婦関係の勘違いに気づく] [折り合いをつける]で構成される。

具体例 [遺された子どもの存在が鎧となる]：「ここで離れてしまったら残った子供もどうなるの？今つながっているのは、上の子だけですな。」「夫婦がこのまま別れてしまうという状況になるのを子供が恐れていることがわかった。」

具体例 [夫婦関係の勘違いに気づく]：「子どもが原因ではなく、勘違いであれば絶対別れない方が良くと思うんですけど」「現実的には、お互いも個々の人間なわけで、すれ違いがある。そのすれ違いを争ってもなんの役にも立っていない。」

具体例 [折り合いをつける]：「子供を亡くしたストレスを跳ね返すための、『何か』を見つけないといけない。ガスを抜いたうえで夫婦の折り合いをつけられるのが理想なのかな」

考 察

1. 悲嘆に向き合えない父親

本結果から、父親は、社会生活の中で内在化された「男らしさ」²⁰⁾に縛られ、悲嘆に向き合えていないことが明らかになった。つまり、父親は、母親を支えるべきという役割意識や男性は悲しみの感情を抑制するという文化規範¹⁵⁾、父親の多忙さと母親への気遣いが悲嘆を後回しにさせる傾向¹⁶⁾、悲しんでいる妻への悲嘆¹⁷⁾などという結果に一致していた。

これまでは、母親を焦点に悲嘆の援助が考えられていた。これは、母子間の愛着が父子間に比べて強く、悲嘆も母親の方がより強い²¹⁾と認識されていることと、母親は感情を表出するため、臨床的に把握されやすいことなどが挙げられる。しかし、抑圧され悲嘆に向き合えずにいる父親を母親の悲嘆のサポーターとして位置づけるとき¹⁴⁾、さらに、父親を【「勘弁してくれ」に至った消耗・疲弊】に追いやることが懸念される。

2. 父親の死別体験は母親とは異なると認識すること

「子どもが死ぬ」という認識は、世界で最も平均余命が長くなり、親との死別体験がない日本の一般的子育て世代にはない。このような社会変動の中で、子どもを亡くした夫婦を目の前にする周囲は、傍らに寄り添い、その悲しみにふれることに当惑する。また、性別の違いや個別の人間としての差異を無視し、「同じ子どもを亡くした親」であること、「夫婦は一心同体である」ことを理由に、形式的で表面的な慰めや叱咤激励によってその場を収める周囲の気遣いが、子どもを亡くした夫婦を、「同じ思いで悲しみを分かち合える唯一の存在」としてさらに孤立させていく。夫婦は、互いの不足を補う存在と認識されるため、子どもの死後、夫は、妻の社会的な役割をも担い、自分の感情を抑制することで家族の機能を保持しようとする。しかし、そのような努力がむしろ【夫婦相互間のズレや溝】を引き起こし、夫婦間でも父親は孤立していった。

これまでの研究からも、子どもを亡くした親は、少なくとも4年間はかなり神経の張りつめた状態が残り、その間のストレスが夫婦関係にも影響する²²⁾ことが示唆されている。また、今回の研究には、離婚した対象は含まれていないが、Kaplanは²³⁾、子どもと死別後50～70%の夫婦が離婚すると報告している。Rando²⁴⁾は、子どもの死後の夫婦間のコミュニケーション問題を挙げている。それは、夫婦が個別の存在であり、悲嘆も非同期的に生じること、すな

わち、夫婦の悲嘆は、内容、経過とも当然、異なる
と述べている。既存の悲嘆の機能は²⁵⁾、死別以前の
状態への回復を目指している。「日常生活の一部」は、
生前に戻ることが可能であるが、夫婦や家族として
の生活が元に戻ることはない。

以上のことから、子どもを亡くした親への援助は、
母親とは異なる父親の体験を理解し、夫婦関係に生
じやすいこのような問題を考慮することが必要であ
る。

本研究の結果の適応範囲

本研究の結果は、日本社会が要求する男性役割に
おける夫婦に適応可能だと考える。また、実際に離
婚した父親の体験は含まれていないこと、父親の死
別後の期間が長期に渡っていることが今後の検討課
題である。

謝 辞

本研究のインタビューに応じていただきました参
加者の皆様と分析にあたり、ご協力下さいました皆
様に、深く感謝申し上げます。

文 献

- 井上ひとみ, 子どもを亡くした家族の援助に関する研
究, 石川県立看護大学附属地域ケアセンター 事業報告
書, 2 巻, 53-56, 2004
- Sanders, C. M.: A comparison of adult bereavement in
the death of a spouse, child, and parent. *Omega: The
Journal of Death and Dying*, 10, 303-322. 1979-1980
- Raphael, B. & Martinek, N.: A longitudinal study
comparing bereavement phenomena in recently bereaved
spouses, adult children, and parents. *Australian and
New Zealand Journal of Psychiatry*, 32, 235-241, 1998
- 国民衛生の動向・厚生指標臨時増刊; 55(9), 62-69,
厚生統計協会, 2008
- Freud S.: Mourning and melancholia. In J. Strachey
(Ed. & Trans.), *The Standard Edition of the complete
psychological works of Sigmund Freud* (14): London:
Hogarth Press & Institute of Psychoanalysis, 243-258
(Original work published 1917)
- Bowlby J.: Attachment and Loss; Sadness and
Depression, *The Tavistock Institute of Human
Relations*, 91, 120-134, 1980
- Worden J W.: *Grief Counseling and Grief Therapy*,
Springer Publishing Company., 1991, (鳴澤寛監: グリー
フカウンセリング, 川島書店, 23-24, 38-40, 2001)
- 鈴木恵理子・小島洋子, 児をなくした母親の悲嘆反応か
らの立ち直り状況, 聖隷クリストファー看護大学紀要 2,
27-36, 1994
- 大井けい子, 胎児または早期新生児と死別した母親の悲
哀過程-死別に関する母親の行動, 母性衛生42:2, 303
-315, 2001
- Shigeko Saiki-Craighill, *The Grieving Process of
Japanese Mothers Who Have Lost a Child to Cancer*,
Part 1: Adjusting to Life After Losing a Child, 260-
267, 2001
- 納富史恵, 藤丸千尋, 岩崎瑞枝, 長期入院児を亡くして
2 年未満の母親の悲嘆プロセス-「分かち合い会」参加
者の体験-, 日本看護研究学会雑誌, 30:2, 65-75, 2007
- 富田拓郎, 大塚明子, 伊藤拓ら, 幼い子どもを失った親
の悲嘆反応と対処行動の測定, *Japanese Journal of
Counseling Science*, 33, 168-180, 2000
- 加藤隆子, 影山セツ子, 小児がんで子どもを亡くした父
親の悲嘆過程に関する研究, 日本科学学会誌, 24(4), 54
-64, 2004
- 木村美香, 夫や家族が死産後の母親の悲嘆過程に与える
影響, 第36回母性看護, 68-70, 2005
- Hughes C. B., Page-Lieberman J.: Fathers experiencing
a perinatal loss, *Death Studies*, 13, 537-556. 1989
- Worth N. J.: Becoming a father to a stillborn child, *Clin.
Nurs. Res.*, 6(1), 72-89. 1997
- Armstrong D.: Exploring fathers' experiences after of
pregnancy after a prior perinatal loss, *MCN Am. J.
Maternal Child Nurs.*, 26(3), 147-153. 2001
- Lundin, T.: Long-term Outcome of Bereavement,
British Journal of Psychiatry, 145: 424-428, 1984b
- 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実
践, 弘文堂, 1999
- 多賀太, 男らしさの社会学-揺らぐ男のライフコース,
世界思想社, 120-150, 2006
- Parks, C.M.: Attachment, bonding, and psychiatric
problems after bereavement in adult life. J. Stevenson
- Hind, & P. Marris, 268-292, 1991
- Hzzard A., Weston J, Gutierrez C.: After a child's death.
Factors related to parental bereavement. *Dev Behav
Pediatric* 13; 24-30, 1992
- Kaplan, D. M.: Predicting the impact of severe illness in
families; A study of the variety of responses to fatal
illness, *Health and Social Work*, 1, 71-82, 1976
- Rando A.: *Parental Loss of A Child*, Research Press
Company, 24-32, 1986
- Neimeyer. R A.: *Meaning Reconstruction and the
Experience of Loss*, 2001
American Psychological Association (富田拓郎・菊池
安希子訳: 喪失と悲嘆の心理療法-構成主義からみた意
味の探究-, 金剛出版, 29-36, 2007)

The bereavement experience by fathers who lost his child

Hitomi Inoue, Michiko Inagaki*

Abstract

The purpose of this study was to clarify the bereavement experience by fathers who lost his child and to focus on the relationship between the parents after the loss. The design of the study was an inductive and qualitative method. Semi-structured interview was conducted to nine fathers. The modified grounded theory approach was used to analyze the data. Eight categories were analytically generated from the data. They consist of 'The moment of boiling and then freezing emotional reaction', 'Playing the role that the father recognized to be in need at the time of loss', 'The father's awareness that mother was the saddest person because of the relationship between mother and child', 'The father's making efforts to play manliness', 'The situations that the father's hiding real intention letting the mother misunderstand him', 'Because of exhaustion the father thought "I wore down, forgive me"', 'Gaps occur in marital relations', and 'Mutual effort to reconstitute marital relations'. It was suggested that the fathers who lost their child needs to new care-model with their marital relationship.